

話し言葉の表現としての ラ抜き言葉に関する研究概観

張 麗

東京外国語大学大学院博士後期課程

要旨

これまで、ラ抜き言葉に関する研究が数多くなされてきた。ラ抜き言葉が言語変化としてどのような変化のプロセスを経て現在まで発展してきたのか、その発生のプロセス、特に言語形式の内的な要因と社会的な要因についての研究が多く行われている。本稿は、これまでなされてきたラ抜き言葉に関する研究、及びこれまでの研究結果を考察した上で、進行中の言語変化であるラ抜き言葉の現在の姿を明らかにし、まだ残っている課題について検討する。主に、未解決と思われる課題—対人コミュニケーションにおいて、ラ抜き言葉がどのような機能を持つのか、を明らかにする必要性を提言する。これによって、今後ラ抜き言葉を代表とする言語変化の進行を推察するのに示唆を与える。

1. はじめに

近年、言語変化の例として、ラ抜き言葉がしばしば取り上げられている。ラ抜き言葉とは、「上一段・下一段・カ変活用の動詞に可能の意の助動詞「られる」が付いたものから「ら」が脱落した語。「見られる」「食べられる」「来られる」に対する「見れる」「食べれる」「来れる」など」(『広辞苑』1998: 2779)である。ラ抜き言葉は、研究者によって、必ずしもラ抜き言葉という名称を用いているわけではない。「可能動詞の破格的用法」(土屋 1971)、「一段動詞の可能動詞化」(松本 1990)、「B 型可能動詞」(渋谷 1993)、「ar 抜きことば」(井上 1998)とも呼ばれている。本論では、一般的に呼ばれているラ抜き言葉を用いることとし、従来の「見られる」という形式をラレル形と呼ぶこととする。

ラ抜き言葉は現在まで、さまざまな観点から捉えられ、その発生の原因、発生のプロセス、使用の現状を解明しようとした研究が数多く行われた。

今までの研究においては、ラ抜き言葉の言語形式と意味を対象としたものが多く、調査対象、調査目的、調査方法がさまざまであり、調査結果も一致しているわけではない。これは、ラ抜き言葉が対人コミュニケーションにおいて、場面、相手、対人関係などによってその使用が違

うからだと考えられる。現在、ラ抜き言葉が話し言葉の表現として若者の間にすでに定着していて、その使用者が中、高年層にも広がっている。宇佐美・井上（1997 a）は、ラ抜き言葉が今後も更に進行する可能性がある（p. 65）と指摘している。

Brown and Levinson（1987）は、仲間同士の「冗談をいう」ことや、「ため口」のような行為をポジティブ・ポライトネス・ストラテジーの一つとして打ち出した。現代日本語におけるラ抜き言葉は、話し言葉の表現として、主に若者の間や親しい間柄において多く使用されているのが現状である。若者の間に、ラ抜き言葉を使うことによって、相手との心理的距離を縮めることができるのなら、それはラ抜き言葉の対人コミュニケーションにおける機能と言えるのではなかろうか。もし、そうだとしたら、それをポライトネス理論の枠組みで捉えたと、ポジティブ・ポライトネスの機能を持つと言えるのではないか。しかし、先行研究では、ラ抜き言葉がどういったコミュニケーション機能を持つか、またはどういう役割を果たすのか、まだ言及されていない。従って、本稿では、ラ抜き言葉に関する先行研究を概観することによって、今後ラ抜き言葉の使用を明らかにし、更にポライトネス理論の観点から、ラ抜き言葉の対人コミュニケーションにおける役割を捉える必要性について提言することを目的とする。

2. ブラウンとレビンソンのポライトネス理論の概要

ブラウンとレビンソン（Brown and Levinson: 以降 B&L を称す）が提出した「ポライトネス理論」（1987）は、これまでに提出されたいくつかの語用論的なポライトネスの理論の中で、最も包括的で影響力が大きいものと評価されてきた。本稿は、B&L のポライトネス理論に基づいて議論を進める。

（宇佐美 2002）では、B&L のポライトネス理論における「ポライトネス」を「円滑な人間関係を確立・維持するための言語ストラテジー」と定義されている。本稿では、宇佐美の観点を採用する。以下に B&L のポライトネス理論を要約する。

B&L のポライトネス理論は、四つの側面から構成されている。A「フェイスという鍵概念」、B「フェイス侵害度見積もりの公式」、C「具体的ポライトネス・ストラテジーの記述」、D「ストラテジーの選択を決定する状況」である。B&L は、対人関係調節における人間の基本的欲求である「フェイス」の概念を鍵概念として提示されている。人間には「ポジティブ・フェイス」と「ネガティブ・フェイス」がある。「ポジティブ・フェイス」とは、他者に理解されたい、好かれたい、喜ばれたい、賞賛されたい、他人に近づきたいというプラス方向への欲求であり、「ネガティブ・フェイス」とは、他者に邪魔されたり、立ち入られたくないというマイナス方向に関わる欲求であると捉えられる。B&L は、この二種のフェイスを脅かさないように配慮することがポライトネスであると捉える。「ポジティブ・フェイス」を配慮するストラテジーを「ポジティブ・フェイス・ストラテジー」、 「ネガティブ・フェイス」を配慮するストラテジーを「ネガティブ・フェイス・ストラテジー」と呼ぶ。フェイスを脅かす行為を「フェイス侵害行為」（Face Threatening Act: FTA）と呼ぶ。そして、フェイス侵害度を軽

減するために用いられる手段を「ポライトネス・ストラテジー」とであると捉える。「話者の自発的なストラテジー」として、以下の5つが挙げられる。

{	{ Do the FAT	{ on record	{ Without redressive action	①
			{ with redressive action { Positive politeness	②
			{ Negative politeness	③
{	{ Don't the FAT	{ Off record		④
				⑤

(Brown & Levinson, 1978, 1987)

- ①FT の軽減行為を行わず、直接に行動を取る
- ②ポジティブ・ポライトネス
- ③ネガティブ・ポライトネス
- ④伝達意図を明示的に示さない（ほのめかす）
- ⑤FTA を行わない

（筆者訳）

B&L は、ポジティブ・ポライトネスの主要ストラテジーを 15、ネガティブ・ポライトネスの主要ストラテジーを 10、オフ・レコードを 15 挙げている。上記の②のポジティブ・ポライトネスは、例えば、相手の何かを褒めたり、共通の趣味を強調したり、相手を楽しくさせるような冗談を言ったりすることや、仲間同士の「ため口」などのことである。

仲間同士の間に多く使用されているラ抜き言葉は、仲間同士としての意識を高めたり、相手に親しみを与えたりする効果を狙って、使われたのではないと思われる。もしそうだとしたら、ラ抜き言葉はポライトネス理論の中のポジティブ・ポライトネス機能を持つのではないかと考えられる。従って、本稿は、ラ抜き言葉の先行研究を概観することによって、今後、ラ抜き言葉のコミュニケーションにおける機能を明らかにする必要があるということを提言する。

3. ラ抜き言葉に関する先行研究

これまで、ラ抜き言葉に関する研究が数多くなされてきた。ラ抜き言葉が言語変化としてどのような変化のプロセスを経て現在まで発展してきたのか、その発生のプロセス、特に言語形式の内的な要因と外的な要因についての研究が多く行われている。一方、ラ抜き言葉が話し言葉の表現として多く使用されているので、数がわずかであるが、談話データを用いた研究もなされている。本章では、これまでなされてきたラ抜き言葉に関する先行研究を考察することによって、ラ抜き言葉に関する研究の残っている課題を検討する。

3.1. ラ抜き言葉に関する研究概観

本節では、これまでのラ抜き言葉に関する研究、主にラ抜き言葉の発生、ラ抜き言葉の使用

に影響する要因，またラ抜き言葉の現在の使用状況に関する研究を概観する。

3. 1. 1. 発生及び影響要因

ラ抜き言葉の発生時期について，井上（1998）によると，もっとも早く記録されたのは昭和初期である。昭和初期には東京の山の手の学生のことばとして「来れない」「見れない」が記録されている。井上（1998: 4）は，文法学者松下大三郎（1878 年（明治 11 年）生まれ）が出身地静岡県の方言では「逃げレル，受けレル，といふなり」という可能の意味を表す言い方が明治時代に既にあったと述べていることが紹介されている。このことから東海地方では，明治時代にすでにラ抜き言葉が使われていたようであると考えられる。

鈴木（1994）では，小説に出ているラ抜き言葉の早い例としては，大正期の葛西善蔵の作品に見られる「これほど手入れしたその花の一つも見れずに追ひ立てられて行く…」などの 8 例を『葛西善蔵全集』から挙げている。井上（1998）はラ抜き言葉が大正末期から昭和初期にかけて，方言から始まって，じわじわと広がってきたと述べている。

ラ抜き言葉の発生のプロセスについて，神田（1964）は，i）可能の助動詞「られる」の「ら」が省略されて成立したもの，ii）五段活用とサ変の未然形「さ」に付ける「れる」が一段動詞およびカ変動詞にも付くようになった，iii）五段活用の可能動詞にひかれて，五段活用以外の動詞からも可能動詞が作られるようになった，という 3 つの説にまとめた上で，「どのように成立したものかはわからないが，五段活用動詞からの可能動詞が有力であることが，この表現形の一般化の基盤になっているといえよう」（pp. 85-86）としている。井上（1998）にも神田の iii）に近い説が見られる。真田（2006）は，ラ抜き言葉が助動詞「ら（れる）」の受身・尊敬・自発・可能の 4 つの意味から，「可能の意味だけを取り出して表す可能動詞という別の形が用いられるようになったもので，「分裂」による言語変化であると同時に，一段活用とカ行変格活用が五段活動へと吸収されていくという「統合」の変化の側面も持っている（pp. 152-153）と述べている。

ラ抜き言葉の発生及びその発展に影響する要因について，内的要因と外的要因に影響されると指摘されている。内的要因とは，動詞自体の活用や形態の変化を指すものであり，外的要因とは，言語の使用に影響する社会的な要素（例，年齢，性別，生育地など）を指す。

内的要因について，動詞の音節数及び肯定形・否定形と関係があると言われている。ラ抜き言葉は，現時点において，進行中の言語変化であるため，すべての一段動詞及びカ行変格活用動詞がラ抜き言葉の形式を持つわけではない。渡辺（1969: 20-21）は「語幹音節数の短いもの（「見る」→「見れる」）のほうが，語幹音節数の長いもの（「顧みる」→「顧みれる」）と比べて，『ら抜き』の形成に容易である」と述べている。中田（1982: 70），加藤（1988: 123-124），田中（1983: 310），中本（1985），山本（1985: 102）も同様の考えを持っている。また，岡崎（1980: 69）は，都内在住の中学生・高校生 411 名を対象にどのような動詞がラ抜き言葉になりやすいかについて調査を行った結果，「未然形の一音節である動詞に多い」，さらに，そ

の中で、上一段活用に属するいくつかの語（例：「見る」「着る」）などがラ抜き言葉になりやすく、のちにカ行変格・下一段活用動詞のいくつかの語という順序であると主張している。井上（1998）は、「研究結果によると、動詞の音節数の方が要因として一番効いているようだ」（p. 10）と述べている。以上のことから、ラ抜き言葉は語幹音節数の短い動詞に発生しやすいという観点が多くの研究者によって証明され、認められていると言える。

ラ抜き言葉の用いられやすさと肯定形・否定形とも関係があると主張する研究も少なくない。先行研究によると、中田（1982）・加藤（1988）・田中（1983）は、ラ抜き言葉の用いやすさについて、肯定形より否定形のほうが高いと述べている。これに対し、辛（2001）は、ラ抜き言葉の使用傾向は、否定形より肯定形のほうが高いと主張している。一方、このような対立した意見に対して、渋谷（1993: 192）は、ラ抜き言葉の用いやすさと肯定形・否定形との関係について、「将来厳密にコントロールされた条件下において調査がなされた結果、制約条件の一つに加えられるようなことがあるとしても、その強さはそれほど大きいものにならないであろう」と主張している。ラ抜き言葉の使用は、現在さまざまな要素に影響されている。ラ抜き言葉と肯定形・否定形との関係は、現時点ではまだ明らかな研究結果がなく、将来これについて調査を行う際は、渋谷（1993）に指摘されたように、話題や場面また対人関係などのいろいろな要素を考え、条件を厳密に統制する必要があると考えられる。

外的要因について、現在まで、ラ抜き言葉の使用が性差、年齢差、地域差、使用場面・対人関係（親疎）などの様々な要素に影響されていると指摘されている。

ラ抜き言葉の使用は、性別の要素に影響されるかどうか、対立した意見が見られる。国立国語研究所（1981）は、「男性の方が女性よりも『レル』の使用率が高い」（p. 236）と指摘している。これに対し、井上（1991）は『大阪市方言の動向—大阪市方言の動態データ』を基に言葉の使用に関する男女差を分析した。その結果、40代より若い女性では男性より「オキレル」をよく使う傾向が見られた（pp. 16-17）。文化庁の調査（2001）でも、ラ抜き言葉の使用率は、20代以上では男性のほうが高く、10代では女性のほうが高い傾向（p. 71）を示している。これらの調査結果は、いずれも個別の動詞に限定して得られたものであるので、必ずしもラ抜き言葉の形を用いられるすべての動詞に当てはまるとは限らない。なぜなら、動詞によって、男女の使用の差が違ふ可能性があると考えられるからである。以上の調査からは、ラ抜き言葉の使用には性別差がある傾向が見られるものの、いずれも個別な動詞に対して行われていて、場面も様々なので、今後もっと詳しく場面を設定して、もっと多くの動詞に対して調査を行えばより正確な結果が得られるであろう。

ラ抜き言葉の使用は、世代と関係があるかどうかに関して、中本（1985）は「この着物はまだ着られる」と「この着物はまだ着れる」の2つの文例の中でどちらを使うかについて200人を対象に調査した結果、高年層の人は「着られる」の使用率が高く、「着れる」が少なく、若年層の人は「着れる」の使用率がしだいに増加していることが分った。真田（1983）では、国立国語研究所の1974年の調査結果、東京で「見れる」を使う人は、60代で20.4%、50代で2

8.4%, 30代で43.4%, 20代で56%, 10代で76.2%である(pp. 87-88)と紹介されている。この結果から、若い世代から高年層への順にしたがって、ラ抜き言葉の使用率が低くなることがわかる。井上(1991)は、真田他¹(1990)の資料を分析した結果、大阪市方言における「起きられる」の使用実態は、60代において「起きられる」と「起きれる」の両方を用いる比率が半々であるが、「50代以下ではオキレルが急増し、若年層では90%近い高率となっている」(p. 16)と述べている。また文化庁文化部国語課(2001)は、「こんなにたくさん食べられない/食べれない」のうち普通使うものはどちらであるかを判断して回答してもらった結果、ラ抜き言葉が若年層においてより多く使用されていることが分った(p. 71)。Matsuda(1993)は、東京をフィールドに、インタビューやグループの談話データを用いて、分析した結果、ラ抜き言葉になりやすいかどうかに関わる要因としては、地域差や性差に比べて年齢差が最も顕著な要因であり、30代以上よりも20代、10代の若年層にラ抜き言葉が多く使用されていることが分かった。動詞によってラ抜き言葉になりやすいかどうか差があるが、以上の調査から、ラ抜き言葉の使用がすべての世代に広がっているが、現状では、若者を中心に集中して使用されていることが言える。

既に前節で紹介されたように、文法学者松下大三郎さんが明治時代に静岡方言でラ抜き言葉が使われていたということから、ラ抜き言葉の使用は、地域によって差があることが考えられる。井上(1998)は、昔から方言としてラ抜き言葉が使われている地域として、「北海道と中部地方、中国・四国地方など」(p. 5)を挙げている。また国立国語研究所の「大都市の言語生活分析編」(1981)は「見れる」と「起きれる」の使用率を調査した結果、北の方は、近畿以西、北海道・北東北、北陸の出身者といった順で、南の方は九州、中国、四国の出身者といった順で使用率が高い(p. 239)としている。井上(1998)は、1980年代生まれで当時中学生のデータにより、ラ抜き言葉の使用がほぼ全国的になっている。高年層においては多少地域の差が残っているが、若い世代においてはほとんど地域差がなくなった(pp. 7-8)と述べている。

3.1.2. 社会的な位置づけ

ラ抜き言葉は、現時点においてまだ進行中の言語変化であり、共通語として認められていないため、ラ抜きことばに対する意識や評価がさまざまである。これまで、ラ抜き言葉に対する意識や評価、またそれに対するイメージを調査した研究が数多く行われてきた。本節では、ラ抜き言葉に対する捉え方、評価、イメージ、及び許容度などの見地から、ラ抜き言葉が社会的にどう認識されているのか、そしてどのように位置づけられているのかを論じる。

3.1.2.1. 規範文法の立場から見たラ抜き言葉

規範文法は、いわゆる従来の伝統文法であり、規範性を重視している。規範文法の立場に立

1 『大阪市方言の動向－大阪市方言の動態データ』(真田信治・岸江信介, 1990)

ってラ抜き言葉を見る場合、ラ抜き言葉が規範文法の基準に則るかどうかに着目するのである。従って、規範文法の立場を取る研究者は、ラ抜き言葉が従来のラレル形と違うから正しい言語現象としての存在が認められるのは難しいと考えている。ラ抜き言葉はその使用がほぼ全国的に広がるまで、しばしば言葉の「乱れ」「ゆれ²」として批判的となった。これらの観点は60年代～80年代の研究において顕著に現れている。

永野（1971）は、ラ抜き言葉について、規範文法の立場から見れば「こういった文法的事実を理論的にそのまま認めてよいかどうかは、議論の余地がある」（p. 231）と述べている。西尾（1973）・加治木（1996）・中本（1985）・土井（1964）も、ラ抜き言葉が「ゆれ」の代表の一つとして取り上げている。土屋（1971）では、「可能動詞の破格的な用法」という意見を示している。松本（1990: 89）では1988年7月16日の「毎日新聞」に「日本語の乱れ」というテーマ特集に「見える」「着れる」などがほかの「全然」「ホントー」などの表現と一緒に載せていると指摘している。こうして、ラ抜き言葉が「乱れ」「ゆれ」の現象の一つとして批判されつつ、1995年第20期国語審議会³では、ラ抜き言葉を「言葉の“揺れ”として客観的に認識し、現時点での適切な言葉遣いを判断すべきだ」との意見が示されている。

国語審議会は、言葉の基準を定める公の機関なので、規範意識が最も強いと言っても過言ではない。上記の研究者の意見や研究機関の規定は、いずれも規範文法の立場から、ラ抜き言葉を規範から外れた「ゆれ」として捉え、ラレル形と共存している言語現象としての存在を許容するが、規範的な言い方としてまでは認めない意見を示している。

3. 1. 2. 2. 社会言語学的な観点から見たラ抜き言葉

3.1.2.1節で、「乱れ」「ゆれ」としてラ抜き言葉を捉える規範文法的な観点を概観したが、この節では、社会言語学的な観点からのラ抜き言葉に対する捉え方について述べる。

社会言語学的な立場から見れば、言語は常に変化するものであり、ラ抜き言葉が進行中の言

2（土井1964: 272）により、言語形式のひとつである単語が、語形交替や語形変化を起こし、形態を異にする二つ以上の形が、同一共時態において、同一場面に共存する現象を「ゆれ」と呼ぶ。また大まかなまとめ方として、さらに次の場合も加えた。

- (1) 二つの異なる言語形式が、お互いに類似した意味を持つか、一方の意味や用法が変化することによって、単独か、または他の語句と呼応して、同一共時態において、同一場面に共存する現象を「ゆれ」と呼ぶ。
- (2) 語形式が意味変化を起こし、形態をひとつにする二つの意味が、同一共時態において共存する現象を「ゆれ」と呼ぶ。
- (3) ある言語形式が、交替や変化現象によって、新たな語形や意味を獲得し、それがラングとして社会一般に承認されるまでの過程を「ゆれ」と呼ぶ。

3 第20期国語審議会（毎日新聞社（『毎日新聞』1995年11月9日朝刊1面『『ら抜き言葉』認められぬ家庭の指導求める 第20期国語審議会が報告』による）「ら抜き言葉」については「言葉が変化する過程で新しい言葉が生まれ、新旧の言葉が併存する場合、言葉の“揺れ”として客観的に認識し、現時点での適切な言葉遣いを判断すべきだ」との基本認識に立ち、(1) 共通語では誤りとされ、新聞などでほとんど使用されていない、(2) 文化庁の調査では約七割が「ら」を抜かずに使っている——などを理由に「共通語では改まった場での使用は認知しかねる」と結論付けた。

表 1 若者語の 4 分類 (井上 1994: 4)

	若者が老いて不使用	若者が老いて使用
後の若者不使用	1 一時的な流行語 新語・時事用語 はやりことば	2 コーホート語 生き残った流行語 世相語
後の若者使用	3 若者世代語 キャンパス用語 学生用語	4 言語変化 新方言 確立した新語

語変化の一つとして捉えられる。井上 (1994) は、現在の若者が使っていることばは、後の若者が使用するかどうか、また若者が年老いた後も使用し続けるか否かによって、若者語を下の表 1 の 1～4 のカテゴリーに分類している (p. 4)。表で分かるように、「4—言語変化」に属する表現は、カテゴリー 1～3 の「一時的流行語」、「コーホート語」、「若者世代語」と、若者同士において多く使用されるという、共通の特徴を持つが、カテゴリー 1～3 と違う特徴を持っている。即ち、今の若者が年をとっても使い続けること、また次の世帯の若者も使いつつあることである。宇佐美・井上 (1997 a) は、「いわゆる『ら抜き言葉』などは、もう『乱れ』ではなく『変化』として捉えてもいいような状況になってきているものの良い例でしょう」(p. 65) と述べている。

真田 (2006) も、ら抜き言葉が分裂による言語変化であると主張すると同時に、一段活用とカ行変格活用が五段活動へと吸収されていくという「統合」の変化の側面も持っている (p. 152-153) と述べている。

3. 1. 2. 3. ら抜き言葉に対する評価・イメージ・容認

既に 3.1.2.1 節で述べたように、ら抜き言葉が進行中の形式なので、規範的な形として認められるべきかどうかをめぐって議論されてきたが、それに伴って、ら抜き言葉に対する評価、イメージ、容認に関する調査も多く行われている。神田 (1961) は、「まだ書きことばとしては一般的ではないが、話しことばとしては普通に広く使われているようである」(p. 71) と述べている。土屋 (1971) が、都内の小・中学校の学生 1593 名を対象に調査したところ、「見れる・来れる」が「感じがいい」とした回答は、「来れる」が全体の 25.5%で、「見れる」が全体の 15.9%であり、「見られる・来られる」が圧倒的に優勢を示している。一方、土屋 (1971) の調査から 20 年経った 90 年代になると、ら抜き言葉に対する評価には著しい変化が見られた。舩田 (1995) は、専門学校の学生を対象に「ら抜き言葉を使うべきでない」についてどう思うかについて意識調査を実施し、その結果、「賛成」と答えた人がわずか 7.1%である。その理由として「日本語の美しさが失われる」、「大人としての言葉遣いができなくなる」などのものである。これに対し、「反対」と答えた人には「『ら』を入れると堅苦しい」、「可能的意味がはっきりしている」、「言いやすい」、「口語的」(p. 30) などの肯定的な評価が圧倒的に多かった。

加治木（1996）は、動詞の5語⁴を対象に抵抗感があるかどうかについて調査した結果、若い人ほどラ抜き言葉に対して抵抗がなく、20代の人が「食べれない」に抵抗を持つ人が3割にとどまる（p.61）。山県（1999）は、井上（1980）が方言を評価する16評価語のうちの12語⁵を用いて、群馬県内と県外に住む大学生を対象にラ抜き言葉の使用状況および意識調査を調べたところ、ラ抜き言葉のイメージとして山県自身が1986年実施した調査と比べた結果、「約10年間で知的評価は高くなり、情的評価は低くなっている」（p.182）と指摘している。

一方、ラ抜き言葉に対する意識やイメージが調査されていると同時に、ラ抜き言葉の合理性について、研究者による評価的な意見が示されている。ラ抜き言葉の合理性を評価する意見を以下のようにまとめる。

①可能動詞として評価される。

神田（1961）は、「現在では、『来れる』『見れる』など五段活用以外の動詞からも盛んに可能動詞が作られるようになっている」（p.75）と述べている。

渋谷（1993: 185-199）が一段動詞及びカ行変格活用動詞のラ抜き言葉の形を「B型可能動詞」と呼ぶことから、ラ抜き言葉を可能動詞として認める意見が窺える。

②文法項目を整える合理的な変化

言語学者の柴田武氏が、ラ抜き言葉の出現の一番大きな理由として、言語機能を分けようとする、『NHK放送と調査』：1992）としている。井上（1998）は、ラ抜き言葉が広がってきた理由として、一つは文法機能の「明晰化」、即ち「可能の言い方とほかの言い方の区別ができること」、もう一つは、文法の「単純化」即ち「動詞の活用が整う」（p.12）ことであると述べている。

以上の観点をまとめると、研究者の中では、ラ抜き言葉の合理性を評価する意見が多いことがわかる。低い世代では、ラ抜き言葉に対する抵抗が低く、肯定的な評価が高いことが分る。

3.1.3. ラ抜き言葉の使用現状

ラ抜き言葉は、書き言葉の表現としてより、話し言葉の表現として多く使用されるのが現状である。本節では、日常生活の中で、ラ抜き言葉がどのように使用されているのか、場面によって使い分けられているかどうか、を概観することによって、ラ抜き言葉の使用現状を明らかにする。

3.1.3.1. 話し言葉として使用

ラ抜き言葉は、話し言葉の表現として使用されることが、早くも大正期の文法学者松下大三郎の『改撰標準日本文法』に、「上一段、下一段、カ行変格皆そうなるが平易な説話にのみ用

4 見れない、食べれない、来れない、数えれない、確かめれない

5 12語は、①都会的、②近代的、③歯切れがよい、④おおらか、⑤素朴、⑥柔らかい、⑦地味、⑧重い、⑨不明瞭、⑩きびしい、⑪豪快、⑫乱暴、である。

める厳粛な説話には用ゐない」(p. 361)と記載されている。松下(1928)からラ抜き言葉が大正期に話し言葉の中では既に用いられていたことが分る。一方、書き言葉にどの程度浸透しているのかも興味深いところである。神田(1961)は「まだ書き言葉としては一般的でないが、話し言葉としては普通に広く使われているようである」(p. 75)と述べている。鈴木(1994)は、ラ抜き言葉が現在書き言葉にも現れているが、話し言葉において大きな勢力を得ているとしている。船木(2002)は、『文学界』をはじめとする文芸誌、漫画、小説などの会話文と地の文のラ抜き言葉の出現頻度を調べた結果、ラ抜き言葉が話し言葉で多く、「意識的に使い分けをされる」作家がいるということから、ラ抜き言葉の話し言葉の表現としての特徴が認知されているとしている。また若者の話し言葉の表現として一般の人にも認められているのではないかと指摘している。更に『ラ抜きことば』を自然に発話し表記もする無意識的使用者と若者言葉や会話文にのみ使用する意識的使用者の両者が並存するのが現状である」(p. 125)と指摘している。舩田(1995)の調査結果から、専門学校がラ抜き言葉が言語形式として正しくないと指摘する意見があるが、ラ抜き言葉の話し言葉としての言語機能を評価する意見が多いことが分る。「日本語の美しさが失われる」、「大人としての言葉遣いができなくなる」などの否定的な意見より、ラ抜き言葉を使う理由として「可能の意味が分りやすいから」、「話しやすいから」、「口語的」(p. 30)などが多く挙げられている。宇佐美・井上(1997b)も、現在、ラ抜き言葉を意識的と非意識的に使っている人がある。意識的に使っている人はラ抜き言葉が「言いやすい」「便利だ」と認識している一方、仲間意識を高めるために意識的に使う人も少なくない(p. 77)と指摘している。

3. 1. 3. 2. 場面による使い分け：上位場面より下位場面で多用

松下(1928)の「平易な説話にのみ用ゐる厳粛な説話には用ゐない」という記述から、大正時代にラ抜き言葉が場面によって使われていたことが分る。木下(1997b)(2000)は「見れる」と「投げれる」の使用場面や使用相手に対して調査した結果、「見れる」も「投げれる」も同世代または自分より下の世代に対して、即ち「気のおけない親しい仲間とのくだけた」会話ではよく使われ、また「上の世代に対するかしこまった場面では『投げれる』は使いにくい」(p. 210)と述べている。加治木(1996)では、1992年のNHK文献の調査で「見られる」・「見れる」の両方を使う「混用派」もしくは「併用派」がほとんどである(pp. 60-61)としている。山県(1999)は、群馬県の大学生214名を対象にラ抜き言葉に対する意識及び評価について調査した結果、「公の場」か「私」の場かによってラ抜き言葉の使用に対する許容度が違うことが分った。ラ抜き言葉が話し言葉の表現として、「親しい人」「友達」「親」などの会話に用いられるのが許容されるのに対し、「作文」「レポート」などの「書き言葉」の場面及び公的な場としての「TVのニュース」「放送」「意見を述べる時」「受験や就職の面接」「大勢の前でのあいさつやスピーチ」などの場で使わないあるいは使うべきでないという認識が見られた(p. 181)。山県(1999)の調査から、ラ抜き言葉が現時点において、場面によって使い分

けられているが、下位場面での使用がより多くの人に許容されているようである。

以上のことから、ラ抜き言葉が自然な口語表現の形式であり、意識的または無意識的に使われていると言える。また、話し言葉の表現としてくだけた場面に多く用いられている現況が見受けられる。しかし、全体的に見れば、ラ抜き言葉に対する評価や、その使用率に関する研究が多く行われているのに対して、ラ抜き言葉の使用場面や用いられる相手に言及する研究が少ないようである。その訳は、ラ抜き言葉の使用が複雑で個人差・場面差・用いられる相手などの様々な要素と関わっているためだと考えられる。今後、より全面的にラ抜き言葉の使用を把握するために、対人関係や使用場面などの要素を考慮した上で調査する必要があると考えられる。また、ラ抜き言葉が書き言葉にどの程度浸透しているのかに関する研究は、船木（2002）が挙げられるが、その後6年も経っているので、ラ抜き言葉の使用が更に広がったと考えられる。従って、今後もラ抜き言葉が書き言葉にどのぐらい現れているのかを調査する必要があるだろう。

3. 2. 談話におけるラ抜き言葉に関する先行研究

3.1節では、これまでなされてきたラ抜き言葉に関する研究をまとめた。これまでの研究では、ラ抜き言葉とラレル形のどちらを使うかというような質問紙を用いた研究が多く、ラ抜き言葉に対する意識調査も質問紙という形で数多く行われている。しかし、3.1.3節で述べたように、ラ抜き言葉が大正期から主に話し言葉の表現として用いられている。現状では、ラ抜き言葉が日常生活の中で、場面や相手によって無意識的にラレル形と使い分ける場合が多いので、ラ抜き言葉が具体的な場面においてどのように使われているのかを調査するには、質問紙には限界を感じる。従って、日常生活の各場面においてラ抜き言葉がどのように使用されているのかを調べるには、談話データを用いて談話レベルで考察する必要があると考えられる。本節では、談話データを用いたラ抜き言葉に関する研究、及びラ抜き言葉に近い機能を持つと思われる若者言葉の談話機能に関する研究を概観し、今後、談話におけるラ抜き言葉を研究する方向性を提示する。

3. 2. 1. 若者言葉の機能に関する研究

既に3.1.2節で述べられているように、ラ抜き言葉は現在進行中の言語変化であるが、若者を中心に使用されているのが現状である。故に、ラ抜き言葉が若者語と同様、または若者語に近い機能を持つのではないかと考えられる。本節では、若者語の機能に関する研究を概観することによって、今後の談話におけるラ抜き言葉に関して研究する際に示唆できるものを提示する。

米川（2006）は、若者ことばの定義と特徴について以下のように述べている。

「若者ことばとは、中学生から三十歳前後の若い男女が仲間内で娯楽・会話促進・連帯・イメージ伝達・隠蔽・緩衝・浄化などのために使う、規範からの自由と遊びを特徴に持つ特有の

語や言い回しである。その使用や意識には個人差がある。若者語とも言う。」(p. 20)

米川は、更にこの定義から、若者語の3つの特徴を取り上げている。

- ①仲間内のことばということ。
- ②娯楽や会話促進などのために使うということ。
- ③ことばの規範からの自由と遊びということ。

村田(2005)は、ポライトネス理論の観点から若者ことばの機能を分析した。村田は、一般的に他大学の学生も使用しているような語－「キャンパス語」を対象に若者ことばの機能について分析した。その結果、キャンパス語に見られた機能(親しみを表す、会話を楽しむ、聞き手と連帯感を分かち合う、言いにくいことを言う際相手を傷つけないようにキャンパス用語を使う)は、ポライトネス理論の枠組みから捉えると、すべてポジティブ・ポライトネスであると述べ、さらに「キャンパス語も、実際には、人間関係の構築・維持にとって重要な役割を担うポジティブ・ポライトネス・ストラテジーである」(pp. 31-32)と述べている。

3. 2. 2. ラ抜き言葉と若者言葉のカテゴリーの違い

現在、ラ抜き言葉の使用者はすべての年齢層の人に広がっているが、若年層において、多く使用されるのが現状である。すでに3.1.2節で述べたように、「若者語の4分類」表の「言語変化」に属するラ抜き言葉が、今の若者の間に多く使用されるという点で、若者言葉と共通している。従って、ラ抜き言葉が若者言葉と同じ、またはそれに近い機能を持っているのではないかと考えられる。言い換えれば、米川(2006)と村田(2005)で提示している「会話促進・連帯・イメージ伝達」「親しみを表す、会話を楽しむ、聞き手と連帯感を分かち合う」などの機能を持つのではないかと考えられる。これに対して、今後具体的な談話データを用いて分析すれば、より正確な結果が得られるのではないかと考えられる。

一方、3.1.2節の「若者語の4分類」という表で示されているように、ラ抜き言葉は進行中の言語変化であり、表のカテゴリー1～3の「一時的流行語」、「コーホート語」、「若者世代語」と違う特徴を持っていることが分る。即ち、今の若者が年をとっても使い続けること、また次の世帯の若者も使いつつあることである。

3. 2. 3. ラ抜き言葉の機能に関する研究

3.2.1節と3.2.2節では、ラ抜き言葉と若者語のカテゴリーの違い及び若者語の談話機能を概観した。本節では、ラ抜き言葉の機能に関する研究をまとめる。ラ抜き言葉に関する研究の中では、アンケート調査が多く行われているが、機能についてまったく言及されなかった。談話データを用いた研究もわずかであり、ラ抜き言葉に関する研究の早期から、話しことばの表現としてのラ抜き言葉の使用が、話者間の人間関係の調節にどう働きかけるのかがあまり注目さ

れていなかったことが窺える。

ラ抜き言葉の機能に関する研究は今までなされていないが、可能表現の談話機能に関する研究は1件あった。

ハイコナロック・堀江薫(2005)は、テレビのトーク番組から12件計165分の会話を採録し、それから、友人同士や家庭での会話を14件計310分、合計26件7時間55分の会話資料に基づいて、可能表現の談話機能について調査した。その結果、丁寧さの機能、及び命題に対する話し手の評価を表す機能を特定した。しかし、この調査は、従来の可能表現が対象とされたので、ラ抜き言葉について言及されなかった。ラ抜き言葉は、可能の意味を表す表現として一般的に多く使われている現状から、今後ラ抜き言葉を対象に、その機能を明らかにする必要があるのではないかと考えられる。

談話データを用いたのは、筆者の調べる限りでは、以下の2件のみである。

Matsuda(1993)は、東京をフィールドに、東京語話者78名を対象に、グループの談話やインタビューの談話データを用いて、ラ抜き言葉の使用を分析した。調査結果によると、ラ抜き言葉になりやすい動詞となりにくい動詞が特定され、また、動詞によって、なりやすい形態となりにくい形態が明らかになった。しかし、Matsudaの談話データを用いてラ抜き言葉の使用実態を調査する方法は、従来の質問紙を用いたアンケート調査より一歩進んだが、ラ抜き言葉の表現形式に対する調査にとどまっている。

木下(1997a, 1998)は、1995年と1996年に放送されたテレビ番組に用いられたラ抜き言葉の用例を採集して分析した。その結果、ラ抜き言葉は、すべての世代のあらゆる職業の人間によって、ほぼ男女差なく用いられていると述べている(1998: 230)。

上記の2件の調査は、質問紙を用いたアンケート調査より一歩進んだと思うが、調査対象がいずれもラ抜き言葉とラレル形の言語形式をどのぐらいの割合で使用するのか、世代差と性差とどちらがその使用の影響要因として効いているのか、などであった。談話において、ラ抜き言葉がどういう意図を狙って話者に使われたのか、聞き手がそれを聞いてどう感じるのか、などに関する調査がまだなされていない。談話において使用されているラ抜き言葉のコミュニケーションにおける役割に関する調査が期待される。

4. ラ抜き言葉の機能を明らかにする必要性

近年、日本語教育の現場では、日本語学習者の日本語学習のニーズが多様化している。日本語教育現場は、従来の文法中心を改め、コミュニケーション能力の養成や異文化理解を深めていくことに重点がおかれるようになってきた。本名(2000)は、中国の日本語教育現場では、日本語の日常挨拶やそれが実際にどのような場面で用いられ、聞き手との社会的な関係によってどんな会話がなされるのか、などといった「具体的な『交際用語』に焦点を当てる」(前掲書: 65)ようになってきたと述べている。松本ほか(2004)は、外国語教育について、文法能力だけでなく社会文化能力、社会言語能力の習得にも留意した重要性が言及されている。ラ抜き

き言葉が日常会話で一般的に使われていて、今後も更にすべての世代及び社会全体に広がる表現なので、円滑なコミュニケーションを行おうとするモチベーションを持つ日本語学習者にとって、ラ抜き言葉がコミュニケーションにおいてどのような機能を持つのかを知ることがとても重要である。

渋谷 (2008) は、同一人の話し手や書き手が聞き手や読み手、場面、目的、メディアなどに応じて使い分ける言葉の多様性、レパートリーのことを「スタイル」と呼んでいる。現在の日本語社会においては、方言と共通語が個人の持つスタイルのレパートリーの大きな部分を構成している (p. 20) と指摘している。更に発話スタイルとして機能する言語項目として、話しことば形式と書きことば形式、言語変化が進行中の併用形 (例、ラ抜き言葉と助動詞ラレルなど)、古いことばと新しいことばなどの形式を挙げている。渋谷は、こうした言語項目は、「同じ内容のことを聞き手や読み手に伝えるにしても、異なった言語形式や発話を使用することによって、発信者が伝えようとする意図、その場面に対する意識、伝える内容に対する捉え方などが表現するところにある」 (p. 21) と述べている。このようなスタイル切り替えの社会的機能として、渋谷は、①表現的機能、②対人的機能、③指示的機能、④交話的機能、⑤メタ言語的機能、⑥詩的機能、の6つの機能を挙げている。ラ抜き言葉と助動詞ラレル形の切り替えの社会的機能を今後明らかにすることが期待される。

ラ抜き言葉は、現時点において進行中の言語変化であり、標準語としてまだ認められていないが、その使用地域はほぼ日本全国に広がっている。日常会話では、ラ抜き言葉は、話者の親疎関係や場面によってラレル形と使い分けられていて、社会方言という性質を持っている。小林 (1996) は、スタイルとしての方言の機能は「話し手たちが同じ地域共同体に属する親しい間柄であることをお互いに確認し合い、そこで行われる会話を気取らないものにしようという態度を表明すること」 (p. 14) と指摘している。現在、ラ抜き言葉が共通語と違う社会方言であるため、方言の機能と同じ、またはそれに近い機能を持つのではないかと考えられる。

Brown & Levinson (1987) のポライトネス理論は、仲間同士の会話に使われている「ため口」や冗談といった発話行為をポジティブ・ポライトネスとして捉えられている。これらの行為は仲間意識を高め、心的距離を縮められる機能があると考えられる。いわゆるラ抜き言葉は、話し言葉の表現として、若者の間や親しい間柄において多く使用されているため、ラ抜き言葉が発話のスタイルとして、仲間意識を高め、話者間の心的距離を縮める機能を持つのではないかと考えられる。もし、そうだとしたら、ポライトネス理論の枠組みで捉えると、ラ抜き言葉は若者の間でポロジティブ・ポライトネスの機能を持つのではないかと考えられる。

従来のラ抜き言葉の使用状況に関する研究では、選択式アンケートや、漫画の空白部分にラ抜き言葉と規範形のどちらかを記入してもらうような調査が多く、ラ抜き言葉の機能に言及する調査が極めて少ない。Matsuda (1993)・木下 (1997a, 1998) は、会話データを用いてラ抜き言葉に関する研究を行っているが、いずれもラ抜き言葉の言語形式だけに焦点を当てた文レベルでの分析に止まっている。ラ抜き言葉がコミュニケーションにおいてどのような機能を

持つのかを明らかにすることがとても重要である。

5. おわりに

本稿は、進行中の言語変化であるラ抜き言葉の先行研究を概観した。ラ抜き言葉が現時点では、その使用地域はほぼ全国的に広がっていて、使用者は若年層から高年層まで広がっている。金水（2003）では、ラ抜き言葉の文法の獲得と文法変化のプロセスについて、可能動詞がまず日常的に馴染みやすい個別的な語彙的派生から発生して包括的・無差別的な文法現象へと広がったという青木（1996）の指摘から、ラ抜き言葉も同じプロセスを辿るかどうかを見ていく必要があると（2003: 62）指摘されている。これまでなされてきたラ抜き言葉に関する研究結果を積み重ねていく上で、ラ抜き言葉の変化のプロセスを推察できるであろう。また、ラ抜き言葉の機能を明らかにするためには、大量の会話データの採集が必要なので、今後自然な会話のデータの収集方法を工夫して、自然な会話に用いられるラ抜き言葉の使用を分析し、その対人コミュニケーションにおける役割を明らかにすることが期待される。

参考文献

- 青木博史（1996）「可能動詞の成立について」、『語文研究』81: 1-13.
- 井上史雄（1980）「方言のイメージ」、『言語生活』341: 48-56
- 井上史雄（1994）『方言学の新天地』1-4, 明治書院.
- 井上史雄（1998）「ラ抜きことばの背景」、『日本語ウォッチング』2-31, 岩波新書.
- 井上文子（1991）「男女の違いから見たことばの世代差 “標準” 意識が男女差をつくる」、『月刊日本語』6月号: 14-18, アクル.
- 宇佐美まゆみ（2002）「ポライトネス理論の展開（1）-（12）」（連載）、『月刊言語』31/1（1月号）-31/13（12月号）, 大修館書店.
- 宇佐美まゆみ・井上史雄（1997 a）「対談 日本語の問題-日本語教育との接点-23-「若者の言葉」（4）新方言と若者語」、『月刊日本語』60-65.
- 宇佐美まゆみ・井上史雄（1997 b）「対談 日本語の問題-日本語教育との接点-24-「若者の言葉」（5）新方言と若者語」、『月刊日本語』73-77.
- 岡崎和夫（1980）「「見レル」「食ベレル」型の可能表現について」、『言語生活』340.
- 加治木美奈子（1996）「“日本語の乱れ” 意識は止まらない～第10回現代人の言語環境調査から②～」、『NHK放送研究と調査』46/9: 60-62, 日本放送出版.
- 加藤和夫（1988）「現代都圏女子大生における可能表現使用の一実施」、『和洋国文研究』23: 110-129, 和洋女子大学国文学会.
- 神田寿美子（1961）「現代東京語の可能表現について」、『東京女子大学日本文学』16: 70-84.
- 神田寿美子（1964）「見れる・出れる-可能表現の動き-」、『口語文法講座3 ゆれている文法』81-91, 明治書院.
- 木下哲生（1997 a）「1995年のテレビ番組における一段動詞およびカ行変格活用動詞の可能動詞-いわゆる「ラ抜き言葉」の用例と分析」、『防衛大学校紀要（人文科学分冊）』125-152, 防衛大学校編.

- 木下哲生（1997 b）「漫画における『見れる』の現状と用法の広がり」、『防衛大学校紀要（人文科学分冊）』75: 61-98.
- 木下哲生（1998）「1996 年に放送された番組における「ら抜き言葉」の用例と分析」、『防衛大学校紀要（人文科学分冊）』: 195-231, 防衛大学校編.
- 木下哲生（2000）「漫画における『投げれる』の現状と用法の広がり」、『防衛大学校紀要（人文科学分冊）』80: 195-221, 防衛大学校編.
- 金水敏（2003）「ら抜き言葉の歴史的研究」、『言語』32/4: 56-62, 大修館書店.
- 国立国語研究所（1981）「大都市の言語生活分析編」、『国立国語研究所報告』70/1: 234-345, 三省堂.
- 小林隆（1996）「現代方言の特質」, 小林隆・篠崎晃一・大西拓一郎共編『方言の現在』11-15, 明治書院.
- 真田信治（1983）『日本語のゆれ』86-89, 南雲堂.
- 真田信治（2006）『社会言語学の展望』, くろしお出版.
- 渋谷勝己（1993）「日本語可能表現の諸相と発展」、『大阪大学文学部紀要』33/1: 185-199.
- 渋谷勝己（2008）「スタイルの使い分けとコミュニケーション」、『月刊言語』37/1: 18-25.
- 辛昭静（2001）「言語変化に対する意識と行動の比較研究—ら抜き言葉を中心に—」, 東京学芸大学大学院教育学研究科（未公刊修士論文）.
- 鈴木英夫（1994）「「ら」抜けことば一みれる, おきれる—」, 『国文学解釈と鑑賞』59/7: 67-76, 至文堂.
- 舩田弘子（1995）「「ら抜きことば」に対する意識と使用の実態—専門学校生を対象としたアンケートならびに授業を通じて—」, 『読書科学』39/1: 25-35.
- 田中章夫（1983）『東京語—その成立と展開—』303-314, 明治書院.
- 土井洋一（1964）「ことばの『ゆれ』」, 『講座現代語』6: 264-280, 明治書院.
- 土屋信一（1971）「東京都の語法のゆれ, 児童生徒言語調査結果報告（2）」, 『文研月報』9月号: 35-37, 日本放送出版協会.
- 中田敏夫（1982）「可能表現変遷に関する一検証, 現代東京の高校生の調査より」, 『日本語研究』5: 64-71, 東京都立大学国語研究室.
- 永野賢（1971）「文法教育のあり方」, 『講座正しい日本語 5 文法編』, 明治書院.
- 中本正智（1985）「東京語のゆれについての考察」, 『東京都立大学人文学会人文学報』173: 164-168.
- 西尾寅弥（1973）「日本語教育における文法の問題—文法的なゆれをめぐる—」, 『日本語教育』20号.
- ハイコナロック・堀江薫（2005）「話し言葉における可能表現」, 南雅彦編『言語学と日本語教育Ⅳ』99-110, くろしお出版.
- 船木久範（2002）「いわゆる「ら抜き言葉」の現況とその考察」, 『日本文学誌要』65: 117-127, 法政大学.
- 文化庁文化部国語課（2001）『平成 12 年度国語に関する世論調査（平成 13 年 1 月調査）』, 財務省印刷局.
- 放送研究部（1992）「放送のことば「見れる」という可能表現について」, 『NHK 放送と調査』34-35.
- 松下大三郎（1928）『改撰標準日本文法』（中文館書店, 復刊（訂正再版）勉誠社 1978）
- 松本哲洋（1990）「一段活用動詞の可能動詞化と日本語教育」, 『麗澤大学紀要』51: 89-101.
- 松本善子・清水崇文・岡野久代・久保百世（2004）「気づき：社会言語学的能力の養成を目指す日本語教育の意義」, 南雅彦・浅野真紀子共編『言語学と日本語教育Ⅲ』42-58, くろしお出版.
- 村田和代（2005）「ボライトネスから見る若者ことばの機能—龍谷大学キャンペン語の分析を通して—」, 『龍谷大学国際センター研究年報』14: 25-37, 竜谷大学国際センター研究年報編集委員会編.
- 本名信行・岡本佐智子（2000）「中国における日本語教育の発展と定着に向けて」, 『アジアにおける日本

- 語教育』51-70, 三修社.
- 山県浩 (1999) 「群馬県の大学生にみるくゝ抜き言葉」—10 年の変化相を中心に—, 『群馬大学教育学部紀要, 人文・社会科学編』48: 167-188.
- 山本稔 (1985) 「話し言葉における『来れる』・『見れる』・『出れる』等の可能表現の実態と文法教育 (4)」, 『山梨大学教育学部研究報告第一分冊, 人文社会科学系』36: 101-108, 山梨大学.
- 米川明彦 (2006) 「若者ことば研究序」, 『月刊言語 (特集)』35/3: 20-24.
- 渡辺実 (1969) 「『行ける』『見れる』一口語における助動詞複合の問題」, 『月刊文法』6: 18-25, 明治書院.
- Brown, Penelope and Levinson, Stephen C. (1987) Politeness: Some Universals in Language Usage (reissued), Cambridge: Cambridge University Press.
- Matsuda, Kenjiro (1993) Dissecting analogical leveling quantitatively: The case of the innovative potential suffix in Tokyo Japanese. Language variation and change, 5:1-34.